Measure For Measure における滑稽な人物

西　野　義　彰

1

W. Shakespeare は1601年頃から *Hamlet* を筆頭に 4 大悲劇を創作したが、それらと平行して「問題劇」あるいは「悲喜劇」と呼ばれるいくつかの劇を書いている。*Measure For Measure* はその中の一つで、J. W. Lever によると、この劇が書かれたのは1604年の 5 月から 8 月の間であり、最初の上演は恐らくペストの流行による劇場閉鎖が解かれたその年の 4 月以降、夏の時期であろうということである[1]。この劇も悲劇的な要素を強く持ちながら最終的には喜劇的な結末を迎える。この劇には警官の Elbow や女郎屋の召使 Pompey など滑稽な人物（道化）が登場する。彼らの特徴や劇における役割について考察する前に、この劇の主題や特色について簡単に見ておきたい。

大まかな筋の流れは以下のようなものである。劇の舞台はウィーンとその近郊になっていて、 1 幕 1 場の早い段階で公爵の Vincentio は一時この国を離れ、留守中は公爵代理の Angelo にすべてを委ねて、その補佐役として老貴族の Escalus を立てるという考えを表明する。寛大な公爵は過去に厳しい法律を定めたが、19年間（nineteen zodiacs, I.ii.157）[2] 一度も執行されたことがなく、そのため国民のモラルは著しく低下し、市の郊外にはいかがわしい建物がたくさん立ち並び、これ以上放置できなくなった。今まで寛大な措置を取ってきた公爵が突然上述の法律を執行すれば、国民は公爵を非難するであろう。道徳や社会秩序の建て直しを公爵代理に任せれば、自分が矢面に立つことはない。公爵は公的にはポーランドへ行くと言うが、実際には修道士に変装して Angelo の手腕及び今後の成り行きを見るつもりでいる。

Angelo（天使のような名前[3]）は、今日まで品行方正の評判が高く禁欲的に生きてきた。公爵代理になると、彼はさっそく密通の罪でClaudioという若い紳士を逮捕し死刑を宣告する。温厚な Escalus はこの件について Angelo に再考を求めるが、彼はそれを拒否する。Claudio の要請で妹の Isabella（見習い修道尼）が Lucio と一緒に兄の助命嘆願のためにやって来ると、彼女の清らか

で美しい姿を見てたちまち不純な欲望を抱く（2 幕 2 場）。Angelo はその場で助命は不可能だと言って一端返すが、再び訪れた Isabella に彼は交換条件として彼女の体を要求する。最も厳しい戒律で有名な女子修道院を求めるほどの Isabella は、当然のことながら Angelo の要求を拒否し立ち去る（2 幕 4 場）。彼女が獄中の Claudio に Angelo との一部始終を伝えると、彼は妹の操を犠牲にして自分を助けてほしいと懇願する。兄の臆病に対して Isabella は厳しい言葉を浴びせるが、二人の会話はそこに居合わせた修道士姿の公爵に立ち聞きされる。公爵は Isabella を脇に連れて行って策を講じ、Angelo の要求に応じる振りをして、実際には指定された場所に身代わりとして以前 Angelo に捨てられた婚約者の Mariana を行かせることにする（3 幕 1 場）。目的を遂げた Angelo は Isabella との約束を破り、Claudio を明朝処刑してその首を彼の元に届けよという令状を出す（4 幕 2 場）。公爵はそれを聞いて飲んだくれの死刑囚の首で解決しようと考えるが、うまく行かない。たまたま Claudio の年齢と風貌がよく似た囚人が今朝病死したため、それが幸いする。Claudio は助かるが、公爵は Isabella にその事実を隠し、残念ながら兄は処刑されたと嘘の報告をして、Angelo に対する怒りを急遽帰国する公爵に直接訴えるよう指示する（4 幕 3 場）。Isabella は指示通り公爵に Angelo の欺瞞を告発するが、公爵は彼女の訴えを信じるどころか投獄を命じ、彼女を弁護する Mariana の話も聞こうとしない。この件の採決を Angelo と Escalus に任せて退いた後、公爵は修道士の姿で戻る。今まで公爵を批判してきた Lucio が再び彼に罵声を浴びせ修道士の頭巾を剥ぎ取ると、その場に公爵が出現する。公爵は畏縮する関係者を毅然とした態度で裁く。Angelo には Mariana と結婚した後に死刑という宣告をするが、Isabella と Mariana の心からの嘆願により救われる。Claudio には Juliet との結婚を、絶えず公爵の悪口を言ってきた Lucio には彼が子供を産ませた娼婦との結婚を命じ、公爵は Isabella に求婚して喜劇的な結末を迎える（5 幕 1 場）。

次に、この劇で扱われている主要な主題について簡単に見ておきたい。よく言われるように、この劇の題名は新約聖書の「マタイによる福音書」から来ていて、劇の宗教的な雰囲気を強く暗示している。実際、この劇には罪と罰、正義と慈悲、罪と赦しなど、宗教的な観念と結びつく表現がしばしば用いられている。また、それらと関連して、絶大な神、神の代理としての王、地上における権力者のあるべき姿などの事柄が扱われている。主要な主題の一つに正義（justice）と慈悲（mercy）が挙げられる。公爵代理が着任後すぐに取り掛かる

のは密通に対する処罰で、見せしめとして婚約者を孕ませた Claudio を逮捕し死刑の宣告をする。公爵の寛大な政策によりウィーンではモラルの低下が著しく、さまざまな問題が生じている。しかし、彼だけが逮捕・処刑されるというのは道理に合わない。彼と同じような罪を犯した者は他にもたくさんいる。彼ら全員が同じ法に基づいて等しく裁かれてこそ、そこに正当性や道理がある。裁く者はわが身を振り返り、清廉潔白でやましい所が無いことを確かめ、人として他者（又は弱者）に対し温かい思いやりを忘れずに行動するという点が重要である。2 幕 2 場における Angelo と Isabella の会話では、正義と慈悲の問題が前面に打ち出され、特に “mercy” という言葉が Isabella によってくり返される。例えば彼女の、“No ceremony that to great ones longs, ... / Become them with one half so good a grace / As mercy does.”（II.ii.59-63）（偉い方々の身分の高さを表す印（中略）は、慈悲の心に比べればさほどふさわしいとは思わない。）という台詞の中に、慈悲に対する彼女の思いが込められている。人を裁く時、特に権力の座にある者は、常に慈悲の心を忘れず、慎重に正しい裁きを行わなければならない。エリザベス朝において “justice” と “mercy” の両極性は神学的思索の事柄であっただけでなく、社会にとって極めて重要な問題であった[4]ようである。Shakespeare もこの事柄に関心を持ち、新しい王を念頭にこの劇でそれを正面から取り上げたと言えよう。この主題は権威とそのあり方ということに直結し、公爵代理の非情で厳しい決断に対する Isabella の批判を通して、作者は権力を持つ者の本来あるべき姿を暗示しているように思われる。

外見と実体（のずれ）という主題はこの劇においても扱われており、特に主要な人物 Angelo と関連している。彼はこれまで謹厳実直で色恋沙汰にも無縁の人物であるという定評があったが、清純で美しい Isabella が兄の命を救うためにやって来ると、彼の内部で眠っていた情欲が目覚め、助命嘆願の交換条件として彼女の体を求める。「天使」という意味の名前を持つ Angelo が、公爵代理の地位と権力を悪用して醜い実体を見せる。この事実を知る者は、Isabella と獄中の Claudio、修道士の姿で 2 人の会話を聞いていた公爵など一部の人物であり、世間のほとんどの人々はそのことを知らない。公爵は劇の初めで、普通の人間が突然大きな権力を与えられた時、どのように変わるのかを見てみたいと言ったが、その期待通り Angelo は弱者に対して権力を乱用し始める。3 幕の終わりで、公爵は Angelo を念頭に独白で次のように語る。“Twice treble shame on Angelo, / To weed my vice, and let his grow! / O, what may man within him

hide, / Though angel on the outward side!”（III.ii.262-65 ）（Angelo は大いに恥を知るべきだ、私の悪徳を根ごと引き抜き、自分のそれを育てるとは。上辺は天使のように見えるが、人間はその内側に何を隠し持っているか分からない。）他方、公爵については、Angelo の行政手腕や社会の有り様を自分の目で確かめようと修道士に変装して密かに行動しているために、変装の目的を告げられた数人の修道士と観客を除いて、ほとんどの人物は 5 幕の終わりまで修道士＝公爵ということを知らない。Angelo とは別のレベルで、公爵の外見と実体の間にずれがあると言える。善人であれ悪党であれ、外見と実体の間でずれが大きく、筋の展開に重要な係わり方をすれば、それだけその人物は観客にとって面白い存在になる。公爵はこの劇において全知全能の神に近い存在に見え、他の人物に対して最も有利な立場、認識において最も高いレベルにある[5]。別の言い方をすると、彼は *The Tempest* の Prospero に最も近い立場にある。公爵は修道士に変装した後もこの劇で大きな影響力を持ち、彼の機転と冷静な判断により、悲劇へと傾き始めた劇を喜劇という形で終わらせるために不可欠の人物である。彼の存在ゆえに、絶望的な悲劇になるはずのものが危機を回避して喜劇的大団円を迎えることができる。

他の大きなものとして、罪と罰、そして赦しという主題が扱われている。Angelo の場合、かつて Mariana と婚約しながら持参金の問題で彼女を捨てたことも一種の罪になるが、公爵代理の権力を悪用して Claudio を助ける条件として Isabella の体を要求し、目的を果たした後に（実際には “bed trick”[6]により婚約者の Mariana が Isabella の身代わりになるのであるが）Claudio を助けるどころか約束を破り、翌朝彼を処刑して、その首を自分のところへ届けよという令状を発する。この問題は運よく無事に済むが、 5 幕で Isabella が Angeloを公爵の前で非難する時、彼はそれを事実無根としてはねつける。彼は結末直前で公爵により、Mariana と結婚した後に処刑という宣告を受けるが、妻と Isabella による懸命の嘆願により死刑を赦される。この場面で重要なのは、Angelo が Isabella との約束を破って兄を処刑したという事実（現実とは異なる）であり、兄を失った深い悲しみと Angelo に対する強烈な憎しみを抱いているIsabella が、それらを超えて公爵の前で跪き Angelo の助命を懇願するという行為である。彼女のこの行為はキリスト教的な色合いを帯びて、敵に対する慈愛のレベルに達する。劇前半で彼女は自分の操のためには兄の死は止むを得ないという厳しい態度を見せたが、ここに至って彼女は大きく成長した姿を見せる。

Claudio も密通の罪を赦され、結末では幸福な結婚に至る。

罪と罰という点では囚人たちを含めて脇役も関係するが、その中で放埒な男Lucio は言動において大いに問題がある。彼は逮捕された Claudio の依頼に良心的に対応し、Isabella に連絡したり、Angelo に対して彼女が懇願する時、彼女の側で何度も助言するなど好感の持てる面があることは確かである。しかし、彼は奔放で無責任な人物であり、みだらな言葉や洒落をしばしば口にする。特に変装している公爵に対して彼は何度もでたらめな批判をしたり、根拠のない悪口雑言を浴びせる。公爵は不快感を抱きながらも正体を隠し続け彼をすぐに罰することはないが、Lucio が Angelo たちの前で公爵の頭巾を剥ぎ取り正体を現した時、彼は毅然たる態度で関係者を裁く。恐れ入る Lucio に対して公爵は、今までの無礼の罰として彼が関係した娼婦との結婚を命じる。Lucio はそれよりも死を望むが、公爵は容赦しない。他の人物たちはそれなりの罰を受け赦されるが、彼にとってこの結婚は自業自得とはいえ厳しいものになる。

既に触れた主題と関連するが、Angelo と Isabella の場合、自己に対する無知、自己認識の深まり、そして人間的な成長という主題があるように思われる。公爵の場合は全知全能の神に近い立場、或いは筋の展開や人物の言動を決定する劇作家に近い立場にあり、劇中で苦難に直面し、それを克服して成長を遂げるということは生じない。Claudio の場合、情欲に駆られ婚約者と密通したが、この行為は長年執行されなかったウィーンの法律に抵触する。しかし彼が逮捕されても驚きの方が遥かに大きく、自分の行為に対する罪意識や道徳心は希薄に見える。死刑を前にして公爵による説諭で死を覚悟しても、Isabella との真剣な対話において決意がぐらつき、妹の操を犠牲にしてもこの世の生に執着する。劇後半でしばらく姿を消して終わり近くで再び登場するが、彼の場合、人間的な成長はあまり感じさせない。Angelo と Isabella の場合、いずれも禁欲的で、聖人のような生き方を続けてきたかそれを目指す人物で、彼らはそれが正しいと確信している。それ故、彼らは世間や自分の中の他の部分、他の考え方に対して無知の状態にあり、柔軟な思考ができない。しかし、それぞれが予期しない状況に置かれ困難な問題に直面して苦悩する中で、自分の脆さや弱点、自分が犯した大きな罪などに気付き、自分や社会に対する認識が深まる。Angeloは公爵が自分の不正を知っていると分かった時、潔くそれを詫びて死を求める。Isabellaは復讐したい自分の敵を赦し、その命を救うために公爵の前で跪くという最も困難な行為により、劇の終わりでは人間として大きな成

長の後を見せる。

他に、人間の中の理性と欲望の主題が挙げられるかもしれない。舞台となるウィーンは劇の始めからモラルの低下、女郎屋の乱立など、大きな問題が生じている。若者の Claudio は節制などあまり念頭になく、欲望のままに突っ走るタイプの人物と言える。社会を立て直すために抜擢されたのが、Angelo という品行方正で知られた堅物である。彼は言わば理性、生真面目、禁欲、厳格さに偏り健全さに欠ける人物である。彼が打ち出す Claudio の逮捕や郊外の女郎屋の取り壊しは、市民から痛烈な批判を浴びる。見習い修道尼になろうとする Isabella も Angelo に似た禁欲的な女性で、人間の欲望に関してほとんど無理解の人物で、放蕩に対して強い嫌悪感を抱いている。理性と欲望のいずれに傾いても生き方は不健全で自然に反する。人間として双方のバランスが取れた生き方が重要であるということが劇の中で暗示されている。

この劇は理性や道徳などを重視する上流階級と情欲や快楽を大らかに認める下層社会という対照的な二つの部分から成り、双方の間で相互作用が起きている。また、すでに見たように、抽象的な観念に関する主題がいくつも扱われていて、この劇を観念についての劇と見ることも可能である。今までに問題劇、道徳劇、寓意劇、風刺劇、暗い喜劇などと呼ばれたが、この劇は筋の展開、公爵の行動や作者の意図などにおいて分かりにくい部分を残している。3 幕 1 場における Claudio と Isabella の場面に公爵が介入する辺りから劇の雰囲気や文体が大きく変わると言われる[7]。確かに、それ以降は散文の使用が多くなり、事情を知る公爵が Isabella や Mariana たちに必要な指示を出しながらうまく立ち回ることで喜劇の予感を与える。また、それ以後、主な人物たちは公爵に操られて動く人形のような印象を与える。しかし、他方で、Lucio や Pompey などの脇役がしばしば登場して猥雑で滑稽な台詞を語り、彼らが自分の持ち味を発揮して生き生きと行動することで、劇世界を豊かにしている。この劇を単に道徳劇とか寓意劇と呼ぶことは間違いにしても、主人公 Isabella に対する道徳（又は人間）教育と彼女の成長が筋の中心に据えられており、その意味でこの劇はアレゴリカルな要素を内包した悲喜劇であると言えよう。

2

この劇において滑稽な人物（又は道化）と呼ぶことができるのは、警官の

Elbow と女郎屋の客引き Pompey である。彼らはそれぞれ与えられた立場で持ち味を発揮しながら、独特の言葉と行動によって喜劇的な側面に貢献している。すでに言及した Lucio はマイナーな人物であるが、上述の 2 人よりも遥かに登場の機会が多い。T. F. Wharton によると、彼の台詞が劇全体の台詞の約 12.3%を占めているということである[8]。彼の性格は自由奔放、多弁で饒舌、他者を平気で中傷するところがあり、作り話が巧い。彼はしばしば機知に富み、滑稽な冗談を言ったり、修道士姿の公爵にためらいなく悪口を浴びせるなど、自分の作り話あるいは「悪意のある機知」(the vicious wit)[9]を楽しんでいるように見える。Claudio の依頼に対して不思議なほど誠実に対応することはあるが、他方で愛人に子供を産ませ女郎屋の女将 Overdone に世話をさせるなど、放縦かつ無責任な行動をくり返し、容易に信頼できない人物である。彼の行動に道化的な要素が見られ、それがしばしばコミック・リリーフとして作用することは事実であるが、他にもいろんな面があるので彼を単に道化と呼ぶにはためらいがある。

警官の Elbow が初めて登場するのは 2 幕 1 場である。彼は数人の役人たちと一緒に Froth と Pompey を連れて入って来る。その直前に老貴族で寛容な人物 Escalusと公爵代理 Angelo が、Claudio の処刑を巡って真剣な会話をし、Angelo が自分に同じ過ちがあった時は同様の裁きを受けると明言して、彼の決意が変わらないことを伝える。Elbow たち猥雑な連中が登場するのはその後である。彼は何かのトラブルで 2 人を Angelo のところへ連れてきた。Angelo が Elbow に名前と用件について尋ねると、彼は散文で次のように答える。

> If it please your honour, I am the poor Duke's constable, and my name is Elbow. I do lean upon justice, sir, and do bring in here before your good honour two notorious benefactors.（II.i.47-50）

彼はここで二つの言い間違いをしている。一つは “poor” の位置で、このままだと「しがない公爵」という意味が強くなり、公爵に対して失礼なことになる。恐らく彼は “the Duke's poor constable”（公爵のしがない警官）と言ったつもりであろう。もう一つは “notorious benefactors”（実にひどい恩人）という表現で、Angelo が “malefactors”（悪人）ではないのかと確認しているように、“benefactors” は “malefactors” を意図したマラプロピズムと考えられる。Angelo

が 2 人は何者か尋ねると、Elbow は

> If it please your honour, I know not well what they are. But precise villains they are, that I am sure of, and void of all profanation in the world, that good Christians ought to have.（53-56）

と答える。彼らが何者なのかよく分からないが、“precise villains”（完全なる悪党）であることは間違いなく、善良なキリスト教徒が持つべき “profanation”（不敬）を彼らは持っていないと言う。恐らくこの “profanation” は “piety”（敬神）のつもりで使った言葉で、ここでも彼はマラプロピズムを犯していると言える。傍らで聞いていた Escalus が Angelo に、彼は “a wise officer” であると皮肉を込めて述べているのは面白い。Angelo の問いかけに Elbow が窮して黙っていると、Pompey が “he’s out at elbow.”（彼はひじが破れて困っている）と、洒落を込めてからかう。

Elbow の愚かさや滑稽さはこのような調子で、マラプロピズム、珍妙な表現、とんちんかんな受け答えがしばしば見られる。たとえば重要なことを誓う時、彼は “I detest before heaven and your honour—” と言って “detest”（ひどく嫌う）を “protest”（断言する）のつもりで用いたり[10]、自分が言ったことを Pompey に否定された時、気分を害して “Prove it before these varlets here, thou honourable man, prove it.”（85-86）と強い口調で言い返す。「これらの悪党の前で証明せよ」と彼は言うが、“these varlets” は公爵代理と Escalus を指していると考えられる。そうであれば、彼は 2 人を悪党と呼ぶことで非常に無礼なことをしている。また、彼はぼん引きの Pompey を “honourable man”（立派な人）と呼んでおり、“honourable” も滑稽な誤用である。Escalus は呆れて Angelo に、“Do you hear how he misplaces?” と言うほかない。

法律用語の誤用に関しては、Pompey の説明を誤解して彼が激怒し、疑問点について Pompey に証明するよう迫る時に見られる。証明ができなければ彼を「暴行罪」（battery, II.i.176）で訴えると言う。Pompey は Elbow に対して何ら暴行を働いていないので、これは的外れの訴えになる。二人の会話を聞いていた Escalus は Elbow をからかって、もし彼が君の耳を叩いたならば、君は「侮辱罪」（slander, 178）で訴えるかもしれないと言う。Elbow はそれを自分への弁護と誤解して Escalus に心から礼を述べる。Pompey の罪がはっきりし

ないので、それが分かるまで彼を泳がせることにしようと Escalus が言うと、Elbow はそれを Pompey に対する宣告と誤解して、“Thou art to continue now, thou varlet, thou art to continue.”（188-89）と勝ち誇ったように言う。Escalus の穏便な処置により Froth と Pompey が解放された後、彼は Elbow にこの仕事に就いて何年になるか、また、管内にその仕事が務まる適任者はいないか尋ねる。それに対して Elbow は 7 年半この仕事をしていること、また、この仕事が務まる頭の良い人物は他に誰もいないと答える。さらに、彼はわずかな手当てをもらってこの仕事を完璧に行っていると自負する。Escalusが、同じ教区内で最も有能な人物の名前を 6 、 7 人提出するよう依頼すると、Elbow はそれを了解して退場する。

次に彼が登場するのは 3 幕 2 場で、他の役人と一緒に Pompey を連れて入って来る。その直前の 3 幕 1 場では、Angelo の驚くべき悪徳と Claudio の揺れる死への覚悟を巡って、兄妹の間で厳しいやり取りがあり、それを聞いていた公爵が介入し、公爵の提案を Isabella が受け入れている。Elbow は入って来るや否や次のように言う。

> Nay, if there be no remedy for it, but that you will needs buy and sell men and women like beasts, we shall have all the world drink brown and white bastard.（III.ii.1-4）

この台詞は再びぽん引きをしたという理由で逮捕された Pompey に向けたもので、もしこのようなことが続けばたくさんの私生児が世の中に溢れると非難する。彼が “drink” という動詞を使ったのは、“bastard” に「私生児」という意味と「スペイン産の甘口ワイン」[11]という意味をかけて洒落を言っているからで、愚鈍な Elbow にしては上出来の洒落であると言える。公爵が Elbow に、この男がどんな罪を犯したのか尋ねると、彼は次のように言う。

> Marry, sir, he hath offended the law; and, sir, we take him to be a thief too, sir: for we have found upon him, sir, a strange pick-lock, which we have sent to the deputy. （III. ii. 14-17）

ともかく Pompey は法律に違反したのであり、錠前をこじあける奇妙な道具を

持っていたので泥棒であるとも考えている、また、その道具は公爵代理に送ったところだと言う。彼は犯罪者を捕え監獄に入れたり、怪しい証拠品を治安の責任者に送るなど、警官としてやるべきことをしっかり行っているようである。これまでの経緯を観ている観客は、Angelo の悪徳と腐敗に対して愚かな Elbow の純粋な言葉と行動が喚起するアイロニーを感じ取るかもしれない。この場面では多弁な Lucio や他の人物がよく話すので、Elbow の活躍の余地はあまり無く、これが彼の最後の登場となる。

Elbow は *Much Ado About Nothing* の Dogberry によく似た人物で、Dogberry の復活と言うことができるが、言動における面白さの点では彼に劣るように思われる。共通するのは、二人とも愚かで頼りない警官であり、マラプロピズムや言い間違いをくり返し、プライドが高く、自分が利口であると思い込んでいる点、また、相手の問いかけに対してしばしば的外れの返答をする点などである。Dogberry の方が台詞の量が多く、それだけマラプロピズムや愚かな言動によって笑いを誘う機会が増える。仕事に対する熱意に関しては大きな相違はないように思われるが、Elbow の場合は道徳に反することにかなり敏感であるようだ。Kenneth McLeish が言うように、彼は「道徳的な激怒」(moral outrage)[12] に焚き付けられる傾向があり、彼の身重の妻が女郎屋で不快な扱いを受けたことで Froth や Pompey を訴え激しく抗議する時や、Pompey が何度か注意されたのに依然としてぽん引きの仕事を続けていることに激怒する時に見られる。しかし彼は愚かな警官として笑いとユーモアの側面に彼なりの貢献をしている。

次に滑稽な人物として Pompey に注目したい。Brian Vickers の指摘によると、彼はフォリオ版の人物一覧において “Clowne” と記されているということである[13]。確かに劇中のト書きや人物名の所に “Clowne” と書かれており、彼の滑稽で大胆な言動や考え方を見ると、作者は彼を道化として設定したように思われる。女郎屋の客引き及び給仕の Pompey が初めて登場するのは 1 幕 2 場で、入って来るや否や Claudio が逮捕されたことに言及する。彼の主人で女将のOverdone がその理由を聞くと、彼は “Groping for trouts, in a peculiar river.” (83) と機知に富む返答をする。Claudio が婚約者と密通したことを他人の川で鮭を密漁したという比喩を用いて面白く表現した。その後、Angelo の厳しい方針により郊外のいかがわしい建物はすべて取壊しになるという話になり、女将が嘆くと彼は散文で次のように慰める。

> Come: fear not you: good counsellors lack no clients: though you change your place, you need not change your trade: I'll be your tapster still; courage, there will be pity taken on you; you that have worn your eyes almost out in the service, you will be considered. （I.ii.98-103）

「すばらしい弁護士は客に事欠かない。あんたが場所を変えても仕事を変える必要は無いし、私はいつもあんたの給仕を務めるつもりだ。あんたはこの仕事で目がやつれるほど努力をしてきたので、きっと配慮してもらえるはずだ」と、彼は心強い慰めの言葉を述べている。彼はまもなく女将と退場するが、2幕1場ではElbowによりFrothとともにAngeloの前に連れてこられる。トラブルの原因についてPompeyが説明するが、つまらないことを話し続けてなかなか核心に触れない。Escalusに注意されると、彼は次のように言う。

> No indeed, sir, not of a pin: you are therein in the right: but to the point. As I say, this Mistress Elbow being, as I say, with child, and being great-bellied, and longing, as I said, for prunes; and having but two in the dish, as I said, Master Froth here, this very man, having eaten the rest, as I said, and, as I say, paying for them very honestly; for, as you know, Master Froth, I could not give you three pence again― （II.i.96-104）

この説明でも、Elbowの身重の妻が煮込んだスモモ（prunes）を求めたこと、Frothが残りを食べて皿には2個しか残っていなかったこと、彼は食べた分のお金を誠実に支払い、3ペンスのおつりを返す必要もなかったことしか触れていない。敢えて彼を誉めるならば、これは素晴らしい饒舌と言える。Pompeyの要領の悪さは前で触れたDogberryを彷彿させる。彼は上の引用で "as I say" や "as I said" などの挿入句を何度も用いており、これも彼の特徴と言えるが、要領の悪さや滑稽さを強調するには大変効果的である。彼の場合、マラプロピズムはElbowより少ない。今後の生き方に関するEscalusとの会話で明らかなのは、彼はぽん引きの仕事を変える気がないこと、色欲は人間の基本的な要素の一つであり、厳しい法律や理性によって押さえつけるべきではないという信念を持っていることである。彼は、たとえ法律で規制しても若者はその方向に

走るだろうし、今後10年間にその種の罪を犯した者すべてを処刑すれば、もっと首を増やせという訓令を出すことになるだろうと予言する（II.i.230-40）。Escalusは彼にもう 2 度と問題を起こしてここに来るな、もし来た時はお前の陣営まで敗走させ、邪悪な Caesar にならねばならないと、歴史上の戦いに言及しながらユーモアを交えて忠告する。彼はそれに対してお礼を述べ、傍白で人間の性と運命が決めるままに生きると自分の思いを吐露し、カプレットで台詞を終えて退場する。

> Whip me? No, no, let carman whip his jade;
> The valiant heart's not whipt out of his trade. （252-53）

「おれを鞭打つくらいなら荷馬車屋にやくざ馬を鞭打たせればいい。勇敢な人間は鞭で打たれたくらいで自分の仕事を止めることはない」と、きっぱり言う。

次に Pompey が登場するのは 3 幕 2 場で、Elbow たちが彼を逮捕し監獄に連れてくる。Elbow の非難に対して彼は次のように言う。

> 'Twas never merry world since, of two usuries, the merriest was put down, and the worser allowed by order of law; . . . （III.ii.6-8）

昔は楽しかったが、今では子を産む二つの商売のうちで最も楽しいもの（売淫）が禁止され、より悪いもの（高利貸し）が法律で許されていると嘆く。修道士姿の公爵が Pompey を下劣なぽん引きと呼んで非難し、すぐに生き方を改めるよう諭しても、改心の様子はほとんど見せない。そこへ Lucio がやって来ると、彼は保釈人になってもらえると期待するが、Lucio は “How now, noble Pompey! What, at the wheels of Caesar? Art thou led in triumph?”（42-43）と言って、彼を Caesar と戦って破れ、凱旋する戦車の前を歩かされた有名な Pompey に例えてからかう。さらに彼は、“Bawd is he doubtless, and of antiquity, too: bawd born.”（65-66）と言って、倒置法や b 音のアリタレーションを用いながらPompey を冷たくあしらう。結局、彼の希望は叶うことなく監獄に入れられる。

Pompey が次に登場するのは 4 幕 2 場（監獄内）で、典獄の Provost との対話でだじゃれを言って相手を困らせる。Provost は、刑の執行で今人手が足り

ず、もし手伝う気があれば足枷を外してやるが、その気がなければ刑期を全うし、釈放の時は鞭打ちを覚悟せよと伝える。それに対して Pompey は、“Sir, I have been an unlawful bawd time out of mind, but yet I will be content to be a lawful hangman.”（14-16）と言ってすぐに承諾する。彼は長い間「違法なぽん引き」（an unlawful bawd）をしてきたが、今回は「合法的な死刑執行人」（a lawful hangman）になると、対照法を用いて機知に富む言い方をする。また、死刑執行人の Abhorson に対して “Pray, sir, by your good favour—for surely, sir, a good favour you have, but that you have a hanging look—do you call, sir, your occupation a mystery?”（IV.ii.30-32）と言って、“by your good favour”（失礼ですが）の後に “a good favour”（よい顔）という表現を続けて洒落を言ったり、“a hanging look”（陰気な顔）に “hang”（絞首刑にする）という意味をかけて戯れる[14]。彼はこの後も、だじゃれや滑稽なことを言って持ち味を発揮し、まもなく退場する。彼は４幕３場で死刑執行人の助手として登場し、監獄に入っている彼のいろんな知人について滑稽に紹介する。その後、頑迷な男 Barnadine に覚悟を決めて準備をするよう伝えるが他に何もできず、すぐに退場する。これが彼の最後の出番となる。

以上、Pompey の特徴を見てきたが、Elbow と比べるとマラプロピズムの頻度はずっと少ない。作者は彼を道化（Clown）として意図したようであるが、劇では女郎屋の給仕、客引きとして登場する。彼の性格は陽気で明るく、普通の道徳的観念とは無縁である。彼が道化として登場している以上、酒や色事は付き物であり、無器用、無責任、無節操なところも彼らしい。特に性に関しては大胆な考えを持っていて、人間の色欲に対して深い理解を示す。Escalus から何度か生き方を変えるよう注意されても変えず、とうとう逮捕されて監獄に入れられるが、彼は自分の考えを貫く変わり者である。彼は獄中で躊躇なく死刑執行人の助手になるが、恐らくそれは少しでも速く監獄から出るための一時的な選択であり、社会に出れば再び元の稼業に戻るであろう。しかし、不思議なことに、このような生き方を続けて逮捕されることはあるが、彼は道化特有の自由を謳歌し、皆のために素晴らしい楽しみを創造して観客をそこへ引き込む[15]。Marjorie Garber が言うように、彼は明らかに他のもっと明るい喜劇において道化が占めていた場所を代わりに占めており、しばしば自分が分かっている以上に素晴らしいことを語る[16]。この劇では正義と慈悲、権力者とあるべき姿、罪と罰、及び赦し、外見と実体（のずれ）、理性と情欲、生と死など

の重い主題が扱われていて、彼の出番は多くはないが、道化らしく機知を交えた冗談やだじゃれを言ったり、愚かで滑稽な行動をすることにより、人間の本能、情欲、生殖などに関する独自の考えを示し、劇の本質的な部分に補足的な論評を加えることで重要な役割を果たしている。Kenneth McLeish は Pompey について、彼はアクションへの付加物ではなく、その哲学的な意味と劇の歩調（dramatic pace）双方の重要な部分であると述べているが[17]、これは彼の本質に迫る面白い見解であると思われる。

Elbow と Pompey は立場（罪を取り締まる側と罪を犯す側）が異なるが、共通するのは 2 人とも滑稽な脇役であり台詞と出番が大きく限られていること、また、重い雰囲気の悲喜劇において、愚かで滑稽な言動を通して笑いを誘い、彼らなりに貴重な役割を果たしていることである。Elbow はマラプロピズムをくり返す、愚かであるがプライドの高い警官であり、侮辱や非道徳的行為が嫌いな人物である。彼が庶民の不正や犯罪をまじめに告発したり取り締まる時、彼の行為は大きな権力を持つ Angelo の隠された悪徳と偽善に対する間接的な批評になっていると言える。他方、Pompey は人間の情欲や快楽に対して深い理解を示し、違法な行為と知りながらぽん引きの仕事を止めようとしない困り者であるが、彼の大胆な言葉と行動がこの劇の中心と人間の本質的な部分に深く関係していて、Elbow よりはるかに重要な存在になっている。2 人ともさほど目立たない脇役であるが、喜劇的で滑稽な人物として笑いとユーモアの側面に貴重な貢献をしている。また、社会の下層に生きる人々の代表として彼らの考え方や見方を提示し、劇世界の幅を広げる点でも彼らは欠かせない人物になっている。

注

1 J. W. Lever（ed.）, The Arden Shakespeare: *Measure For Measure,* Methuen & Co. Ltd., 1965, p. xxxv.

2 *Ibid*. 以後、原文の引用はすべてこの版による。

3 Marjorie Garber, *Shakespeare After All*, Anchor Books, New York, 2004, p. 570.

4 J. W. Lever（ed.）, The Arden Shakespeare: *Measure For Measure*, *op. cit*, p. lxiii.

5 Bertrand Evans, *Shakespeare's Comedies*, Oxford University Press, 1960, pp. 190,

209.

6 Jack A. Vaughn, *Shakespeare's Comedies*, Frederick Ungar Publishing Co., 1980, p. 162.

7 *Ibid*., p. 162.

8 T. F. Wharton, *An Introduction to the Variety of Criticism: Measure For Measure,* Macmillan Education Ltd., 1989, p. 51.

9 Brian Vickers, *The Artistry of Shakespeare's Prose*, Methuen & Co. Ltd., p. 324.

10 J. W. Lever（ed.）, The Arden Shakespeare: *Measure For Measure*, *op. cit.,* p. 31, note.

11 *Ibid*., p. 82, note.

12 Kenneth McLeish, *Longman Guide to Shakespeare's Characters*, Longman Group Limited, 1985, p. 82.

13 Brian Vickers, *The Artistry of Shakespeare's Prose, op. cit*., p. 315.

14 J. W. Lever（ed.）, The Arden Shakespeare: *Measure For Measure*, *op. cit*., p. 102, note.

15 Bente A. Videbæk, *The Stage Clown in Shakespeare's Theatre,* Greenwood Press, 1996, p. 72.

16 Marjorie Garber, *Shakespeare After All, op. cit*., p. 574.

17 Kenneth McLeish, *Longman Guide to Shakespeare's Characters, op. cit.,* p. 199.